

アート教育を通じた地域創生活動が産・官・学にもたらす効果 ー佐久間アートプロジェクトを事例にしてー

Effects of regional development activities through art education on industry, government, and academia. The Sakuma Art Project as a Case Study.

中川 晃

デザイン学部 デザイン学科

NAKAGAWA Akira

Department of Design, Faculty of Design

小川 直茂

デザイン学部 デザイン学科

OGAWA Naoshige

Department of Design, Faculty of Design

本報告は2023年に静岡県浜松市天竜区佐久間町にて実施された、地域の駅舎にアートウォールを制作設置する〈佐久間アートプロジェクト〉というアート教育を通じた地域創生活動に関する報告である。そのプロジェクト発足から制作迄の一連の経緯を概観すると共に、プロジェクトに携わった地域児童、産業関係者、行政関係者、教育関係者に発生した効果をアンケート調査にて確認するものである。調査の結果、間接的関与は地域への関心と地域参画への意識醸成に与える効果がある事が示唆され、また、地域創生活動は地域児童にとっても地域を再発見し、愛着を深める効果がある事が示唆された。

This is a report on the Sakuma Art Project, a community development activity through art education that took place in Sakuma-cho, Tenryu-ku, Hamamatsu City, Shizuoka Prefecture, in 2023 to create and install an art wall in a local station building. A questionnaire survey was conducted to outline the sequence of events from the project's inception to its production, as well as to confirm the effects of the project on the local children, industry, government, and education personnel involved in the project. The results of the survey suggest that indirect involvement has an effect on fostering interest in the community and awareness of community participation, and that community creation activities have an effect on local children rediscovering their community and deepening their attachment to it.

1. はじめに

本報告は静岡県浜松市天竜区佐久間町（以下、佐久間町）にあるJR飯田線浦川駅（以下、浦川駅）駅舎内（図-1）に設置されたアートウォール¹（図-2、図-3）の制作（以下、佐久間アートプロジェクト）に関する内容を取り上げたものである。〈佐久間アートプロジェクト〉はアート教育を通じて地域創生活動²を行うことを目的としており、2022年6月より準備が開始され2023年4月から同7月にかけて参加の大学生（以下、学生）、ならびに地域の児童達によって作画が手掛けられた。〈佐久間アートプロジェクト〉を実施した結果、関係した産業関係者、行政関係者、教育関係者において当初は想定していなかった様々な効果が確認された。本報告では、これらの効果を論旨に設定し、〈佐久間アートプロジェクト〉の一連の経緯を概観すると同時に、もたらされた効果に関する分析と考察を行っていく。



図-1 JR飯田線浦川駅

出所：佐久間アートプロジェクト

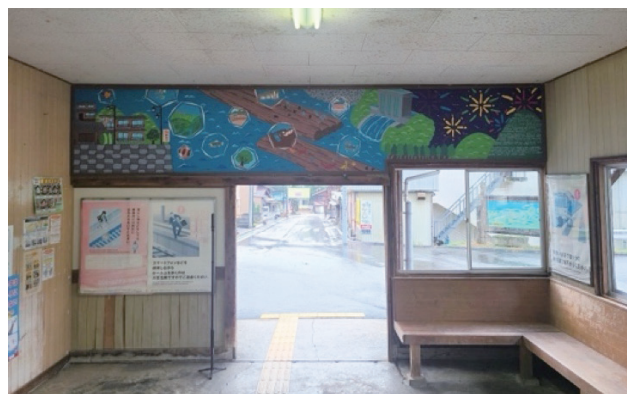


図-2 制作されたアートウォール

出所：佐久間アートプロジェクト



図-3 制作されたアートウォール

出所：佐久間アートプロジェクト

2. 佐久間アートプロジェクトに至る経緯

2.1. シン・サクマ計画

〈佐久間アートプロジェクト〉の実施母体は、静岡ガスコム株式会社代表取締役社長である浅野孝記氏（以下、浅野）と、浜松山里いきいき応援隊（地域おこし協力隊）隊員の金田鈴音氏（以下、金田）の両名が佐久間町の活性化を目的として設立した〈シン・サクマ計画〉という任意団体である。浅野は自身が経営する企業の関連会社が佐久間町に存在していたことで同地区の著しい人口減少を見聞きしており、かねてよりその状況を憂慮していた。また、佐久間町出身者である金田は故郷を盛り立てたいという想いを強く抱いていた。そして、佐久間町の活性化を目的として2022年6月に団体を設立するに至った。その後、二人を中心に発足した〈シン・サクマ計画〉には浜松市周辺の企業経営者や佐久間町関係者、静岡文化芸術大学³関係者を中心に賛同者が集い、2022年7月における参加者は17名となった（表-1）。

表-1 シン・サクマ計画における初期参加者（2022年7月時点）

氏名	所属（役職）
浅野 孝記	静岡ガスコム株式会社（代表取締役社長） 豊栄産業株式会社（取締役）
金田 鈴音	浜松山里いきいき応援隊（地域おこし協力隊） 隊員
青島 翔平	浜松山里いきいき応援隊（地域おこし協力隊） 隊員
植田 勝也	静岡文化芸術大学 学生
大見 拳也	株式会社静岡新聞社／静岡放送株式会社
酒井 美緒	静岡文化芸術大学 学生
坂下 益通	株式会社坂下製作所（代表取締役社長）
笹野 良太	豊栄産業株式会社
鈴木 仁	株式会社イーグル（代表取締役社長）
須山 雄造	須山建設株式会社（代表取締役社長）
立川 可門	株式会社静岡新聞社／静岡放送株式会社
富田 菜々美	静岡文化芸術大学 学生
中川 晃	静岡文化芸術大学 デザイン学部 教員
中村 庄児	静岡ガスコム株式会社
原 延明	兼八産業株式会社（代表取締役社長）
森田 瑞希	静岡文化芸術大学 学生
山田 恵美莉	浜松山里いきいき応援隊（地域おこし協力隊） 隊員

出所：筆者作成

2.2. 浜松市天竜区佐久間町

〈佐久間アートプロジェクト〉の活動対象地域である佐久間町について紹介する。佐久間町（図-4）は古くは磐田郡に属し、浜松から北に約40kmの場所に位置して静岡県西部の〈北遠〉と呼称される地域であった。2005年に浜松市に編入合併、2007年の浜松市政令指定都市移行に伴い天竜区の一部となった。天竜川沿いに位置し、かつては林業を主な産業として繁栄していた。また、戦後復興における土木事業の象徴的な存在である〈佐久間ダム⁴〉（図-5）が1956年に竣工し、以後現在に至るまで近隣大都市への電力供給源としての役割も担っている。佐久間町における目

下の地域課題は高齢化と過疎化である。浜松市（2023）によると、佐久間町の2008年4月1日時点での人口は5,076名であり、その内65歳以上は2,447名で平均年齢57.8歳であった。それから15年後の2023年4月1日時点での人口は2,739名であり、その内65歳以上は1,750名で平均年齢67.2歳である。15年間で人口は約45%減少、平均年齢は10歳ほど高齢化しており、高齢化と過疎化が著しく進行している状況である（表-2）。



図-4 佐久間町浦川

出所：佐久間アートプロジェクト



図-5 佐久間ダム

出所：佐久間アートプロジェクト

表-2 佐久間町の2008年と2023年における人口、並びに平均

	人口	平均年齢
2008年4月1日	5,076名	57.8歳
2023年4月1日	2,739名	67.2歳
増減数	-2,337名	10.6歳

出所：浜松市の資料をもとに筆者作成

2.3. 佐久間アートプロジェクト実施への経緯

〈佐久間アートプロジェクト〉の実施に至る経緯を説明する。「佐久間町を活性化させたい」という理念を掲げる任意団体〈シン・サクマ計画〉であったが、一方で活性化の具体案は2022年7月時点において特に定められていなかった。そのため、概ね月に一度の頻度で関係者が集まって企画会議を実施するようになる。企画会議では他の地域における地域創生事例や参加者から提案された企画の検討が重ねられ、釣りやドッグランを併用する佐久間の自然を活かしたワーケーション施策や広大な敷地を活かしたドローンレースなど、多岐に渡る企画が検討された。そうした中で、〈佐久間の慣習や風物を残し、人口減少とともに薄れていく記憶を留める〉事をコンセプトとし、浦川駅を〈想い出の器〉と位置付けて佐久間町の歴史や風物のアートウォールを描くという企画が生まれ、同企画の実施に向けて取り組んでいくことで関係者の意見が一致した。2022年9月には浦川駅駅舎にアートウォールを設置する方針が決定し、〈佐久間アートプロジェクト〉が発足するに至った。

次に〈佐久間アートプロジェクト〉の実施に向けた関係諸機関との調整に関して述べる。当該プロジェクトの実施にあたっては、行政関係、JR東海、教育関係、産業関係など多数の外部機関の協力が必要となる。設立されたばかりで活動実績を持たない〈シン・サクマ計画〉は外部からの認知度が低かったため、外部機関との信頼関係の構築に向けて、まず浜松市の後援を受け、また、天竜区観光協会佐久間支部との共同主催の形式を取った。これら行政機関との調整は浜松山里いきいき応援隊（地域おこし協力隊）隊員である金田を中心に進められた。続いてアートウォール設置計画箇所である浦川駅を所管するJR東海との調整を行ったが、公共施設である駅舎内への設置は安全面をはじめとして複数のクリアすべき課題が存在した。幾度も協議が重ねられ、設計事務所による構造検討といった安全性の担保や綿密な施工計画による鉄道運行へ影響検討といった細部に渡る調整が図られた。これらは株式会社静岡新聞社の大見氏（以下、大見）、浅野、静岡文化芸術大学教員の中川（筆者、以下、中川）が中心となって進められた。そして、アートウォールの作画を行う地域児童や静岡文化芸術大学の学生を募集するにあたり、佐久間町の小学校⁵・中学校⁶・高校⁷との調整、静岡文化芸術大学における授業化⁸といった調整が為された。これらは佐久間町出身でもある金田、および中川を中心に進められた。他方、本プロジェクトを実施する上での資金面の確保も課題の一つであった。アートウォールの作画作業は浜松市中区に在る静岡文化芸術大学内にて実施される計画となっていた。そのため、佐久間町の児童は作業に参加するために約40kmを往復せねばならず、安全性確保の観点からもバス等をチャーターする必要性があった。更には約10平方メートルの作画における刷毛・絵筆・塗料といった画材道具の調達も必要であり、これらを合わせて概算で約40万円の予算が試算された。そのため、本プロジェクトへの協賛金募集を実施する事になり、これらは浅野を中心にした〈シン・サクマ計画〉の企業経営者らによって進められた。以上の経緯を分析すると、当該プロジェクトの事前準備段階において関係各機関と迅速に調整が図れたのは〈シン・サクマ計画〉が多様な賛同者の集団であった事に因るところが大きいと言えよう。

そして、関係諸機関との調整を図ると同時にアートウォールの制作工程上で重視する要素についての検討が行われ、その結果3点の項目が見出された。1点目は「佐久間町の歴史や風物といったモチーフは地域住人の方の想いを出来る限り取り入れること」、2点目は「地域の児童と浜松市内の学生が協働で描くこと」、そして3点目は「佐久間町と大学、企業、行政機関が密に連携を取ること」である（表-3）。

表-3 制作過程において重視する3要素

- 1 佐久間町の歴史や風物といったモチーフは地域住人の方の想いを出来る限り取り入れること。
- 2 地域の子ども達と浜松市内の大学生が協働で描くこと。
- 3 佐久間町と大学、企業、行政機関が密に連携を取ること。

出所：筆者作成

以上、「佐久間町を活性化させたい」という思いから始動した〈シン・サクマ計画〉は徐々に賛同者を増やし、地域創生に向けた具体的な提案として〈佐久間アートプロジェクト〉がスタートした。そして、本プロジェクトを実行するために行政関係、JR東海、教育関係、産業関係といった多様な組織との連携を行った。これらを概括すると〈佐久間アートプロジェクト〉の事前準備には4つのプロセスが存在する事が見て取れる（図-6）。ここで興味深いのが②である。多くの産官学連携事業等の場合、具体的な実施内容に対して賛同者が参集するのが一般的である。しかしながら、〈シン・サクマ計画〉は具体的な実施案が無く、①の理念のみの状態で賛同者が参集し、多様な意見交換が発生している。理念にもとづいた柔軟な企画会議が行われる過程で関係者の結束力は強化され、また関係者個々の特性に応じた役割が自然な形で設定されていった。そうした結果が、短期間での円滑なプロジェクト遂行に大きく寄与したと推察できる。これは地域創生における賛同者の関わり方において、実施内容の策定に先立ち理念の共有と検討のプロセスを充実させることが有効である事を示唆していると言えよう。



図-6 佐久間アートプロジェクトにおける事前準備のプロセス

出所：筆者作成

3. 佐久間アートプロジェクト

3.1. 実施概要

〈佐久間アートプロジェクト〉にて制作されるアートウォールは、アルミ複合板を支持体として使用し、浦川駅駅舎内における出入り口開口部分の上部、欄間部に相当する2箇所を設置される。1箇所あたり約5平方メートルで、合計約10平方メートルの作画範囲となる（図-7、図-8）。作画制作に参加したのは佐久間中学校の生徒1名、浦川小学校の児童7名、静岡文化芸術大学の学生11名および指導教員2名である。フィールドワークや作画に関しては本章3節

にて詳述するが、2023年4月から7月にかけてチームビルディングとリサーチを主目的にしたフィールドワークが2日間、作画が4日間の合計6日間実施された。そして、制作されたアートウォールは須山建設株式会社⁹により浦川駅に2023年8月3日に設置された。



図-7 ホーム側設置予定箇所（黒枠範囲）

出所：佐久間アートプロジェクト



図-8 街側設置予定箇所（黒枠範囲）

出所：佐久間アートプロジェクト

3.2. 佐久間アートプロジェクトに関わった人々

本節では〈佐久間アートプロジェクト〉に関わった人々について述べる。地域創生に関する報告書の多くは直接携わったメンバーに焦点を当てるが、本稿では間接的に携わった方々にも着目していきたい。〈佐久間アートプロジェクト〉ではプロジェクトへの関わり方を4分類、6種に大別する事が出来る。それは、①〈佐久間アートプロジェクト〉に直接関わった佐久間町住民、②〈佐久間アートプロジェクト〉には直接ではないが、リサーチ等で関わった佐久間町住民、③〈佐久間アートプロジェクト〉に直接関わった静岡文化芸術大学の教員・学生、④〈佐久間アートプロジェクト〉に直接関わった浜松市等行政関係者、⑤〈佐久間アートプロジェクト〉に直接関わった浜松市周辺の企業関係者、⑥〈佐久間アートプロジェクト〉には直接ではないが、協賛金等の形で関わった浜松市周辺の企業関係者である（表-4）。

表-4 佐久間アートプロジェクトに関わった人々の区分

分類	佐久間アートプロジェクトとの関わり方
1 地域関係者	直接関わった佐久間町住民
2 地域関係者	直接ではないがリサーチ等で関わった佐久間町住民
3 教育関係者	直接関わった静岡文化芸術大学の教員・学生
4 行政関係者	直接関わった浜松市等行政関係者
5 企業関係者	直接関わった浜松市周辺の企業関係者
6 企業関係者	直接ではないが協賛金の形で関わった浜松市周辺の企業関係者

出所：筆者作成

3.3. 佐久間アートプロジェクトの実施詳細

3.3.1. 教員の体制

ここで指導教員に関して述べる。静岡文化芸術大学の指導教員は前述の中川と、同じくデザイン学科所属の小川（以下、小川）である。二人の教員は共にアートウォールの作画に関する知見と指導実績を有していたが、本プロジェクトでは行政機関や企業関係者との密な調整が発生する事が予想されたため、中川が主に調整関連を担い、小川は作画作業指導を中心に担当するという分業体制が取られた。この分業体制により調整業務の不備や遅延から作画作業への影響が発生するといった事は皆無であった。

3.3.2. 制作工程

〈佐久間アートプロジェクト〉の制作工程に関して述べる。2章3節にて述べたとおり、本プロジェクトにおいては単に成果物の完成を最優先事項とするのではなく、〈佐久間町の歴史や風物といったモチーフは地域住民の方の想いを出来る限り取り入れること。〉〈地域の子供達と浜松市内の大学生が協働で描くこと。〉という点を重視している。そのため、全6日間という限られた時間の1/3にあたる時間をチームビルディングとリサーチに費やした。地域と地域外の相互理解、信頼を元に協働して制作する体制の構築事を目指し、初日である2023年4月22日は浜松市立浦川小学校体育館にて自己紹介やプロジェクト概要説明の他、〈佐久間〉をテーマにしたワークショップを行い、また、会食を通じて親睦を深めた（図-9、図-10）。その結果、既に初日終了時点では大学生と小・中学生の間には相互理解や信頼といった関係性が芽生え始めていたと推察出来る。



図-9 初日ワークショップの様子

出所：佐久間アートプロジェクト



図-10 初日ワークショップの様子

出所：佐久間アートプロジェクト

制作2日目の2023年5月20日は、佐久間町の小・中学生（以下、児童）と静岡文化芸術大学の大学生（以下、学生）が〈佐久間町の歴史や風物といったモチーフは地域住人の方の想いを出来る限り取り入れること。〉を目的として、地域の歴史に詳しい佐久間町の関係者の方にインタビューを行った。関係者の方からは地域の伝統芸能であった〈浦川歌舞伎¹⁰〉や〈佐久間ダム〉、〈祭事に用いる山車〉といった地域を象徴する歴史や風物の解説を受けた（図-11、図-12）。このプロセスの目的はアートウォールを描く児童、学生が佐久間町のアイデンティティを理解し、ディスカッションの上でモチーフを抽出することにある。それに加えて、児童にとっては自身が慣れ親しんでいる地域の個性や魅力を再認識し、学生にとっては地域への理解を深める切掛となる事も意図している。

そして、1日目のワークショップおよび2日目のインタビューを経て、アートウォールに描く地域のモチーフが決定した。



図-11 浦川歌舞伎の解説を受けている様子

出所：佐久間アートプロジェクト



図-12 佐久間ダムの解説を受けている様子

出所：佐久間アートプロジェクト

チームビルディングとリサーチを終え、アートウォールに描くモチーフ選定が完了し、作画作業のフェーズに入った。制作3日目から6日目迄の作業は全て浜松市中央区にある静岡文化芸術大学内にて実施された。ここでアートウォールに描かれるモチーフに関して触れたい。選定されたモチーフは佐久間町の歴史や風俗、情景、祭事、建築と多岐に渡る。具体的には浦川歌舞伎や筏、花火大会や山車、鉄道、浦川の街並み、小学校といったものである。これらのモチーフは一見して相関が存在しないように見受けられるが、佐久間町で育ち生活を営む人にとっての日常という共通点が見出せる（表-5）。

制作3日目の2023年6月10日は、アートウォールの支持体として採用したアルミ複合板¹¹にサンドペーパーによる目荒らしを行った後、下地塗料の塗布、そして下描きを行った（図-13、図-14）。なお、支持体にアルミ複合板を採用した理由としては、設置場所から離れた大学構内で作画作業を行って完成後に制作物を移動する関係上、可搬性に優れる軽量の支持体が求められたことなどが挙げられる。

制作4日目の2023年6月24日、5日目の2023年7月8日は作画作業を実施した。この時点で最も留意したのが各モチーフの画風の差異を最小限に留める事である。そのため、指導教員である中川と小川は学生や児童の制作技術や特性を予め見極め、個々の制作者の特性に合わせてモチーフの担当を割り振った。その結果、仕上がった各モチーフに画風の差が大きく発生する事は無かった。そして、制作6日目の2023年7月15日は細部の調整と水性クリアの塗布を実施し、アートウォールの作画作業は完了した。

表-5 アートウォールに描かれた主なモチーフ

アートウォールに描かれた主なモチーフ	
1	浦川歌舞伎
2	浦川まつり 花火大会
3	浦川まつり 山車
4	JR飯田線
5	浜松市立浦川小学校
6	浜松私立浦川幼稚園
7	佐久間ダム
8	佐久間町浦川の街並み
9	天竜川
10	鮎・鮎釣り
11	筏
12	彼岸花
13	竹藪

出所：筆者作成



図-13 アルミ複合板への下描きの様子

出所：佐久間アートプロジェクト



図-14 作画作業の様子

出所：佐久間アートプロジェクト

以上の〈佐久間アートプロジェクト〉におけるアートウォール制作工程を纏めると表-6の通りとなる。アートウォール制作の一連のプロセス（図-15）を振り返って改めて感じるのは、作画作業に入るまでのリサーチフェーズの重要性である。〈佐久間アートプロジェクト〉では〈佐久間の慣習や風物を残し、人口減少とともに薄れていく記憶を留める〉事を重要な目的と位置づけており、その実現に向けては佐久間という地域のアイデンティティに対する深い理解が不可欠である。地域在住の児童と学生とが十分な時間をかけてリサーチフェーズに取り組むことで、制作関係者全員が佐久間地域への高い理解を持ってモチーフ選定や作画表現に臨むことができた。このことが、プロジェクトのクオリティを大きく高めたと考える。

表-6 アートウォールの制作工程

場所		主な作業
1日目	浦川小学校	チームビルディングを目的としたワークショップ
2日目	浦川小学校	佐久間町関係者へのインタビュー、モチーフの抽出
3日目	静岡文化芸術大学	下地調整、下地塗り、下描き
4日目	静岡文化芸術大学	作画作業
5日目	静岡文化芸術大学	作画作業
6日目	静岡文化芸術大学	細部の調整、クリア塗装

出所：筆者作成



図-15 アートウォール制作の主なプロセス

出所：筆者作成

3.3.3. アートウォールの作品表現に関して
次にアートウォールにおける作品表現に関して述べる。当該アートウォールは佐久間にまつわる多様なモチーフを作画対象とし、また、多様な作画力の作画メンバーで構成されている（静岡文化芸術文化大学の参加学生11名の内訳は文化政策学部6名、デザイン学部5名）。そのため、作画の纏まりを出す為に制作指導上の工夫を要した。多様なモチーフのレイアウトに関しては線路や川、山の稜線といった〈線的な造形特性を持つモチーフ〉を活用してモチーフ同士の区切りとし、コラーージュする事で違和感を無くす手法を採用した。また、作画力が学生と大幅に異なる児童においては、煌めきをイメージした六角形状の作画スペースを設け、作画範囲をその中に留める事で周囲との調和を持たせる手法とした（図-16）。この手法は周囲との調和を成立させるのみならず児童の作品を引き立てる効果も有しており、それによって作品表現の体験として児童の達成感や満足感を創出する事も意図している。

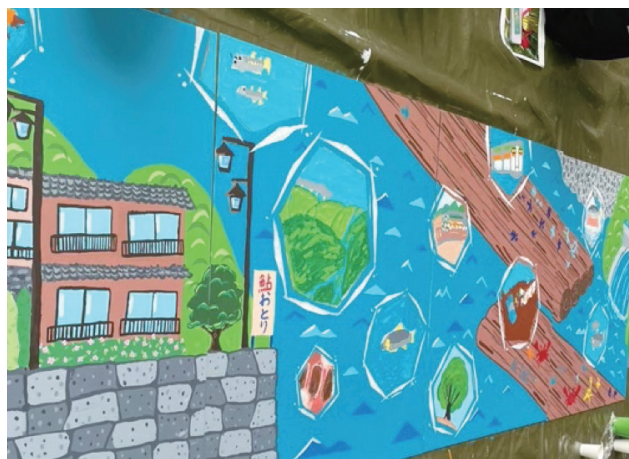


図-16 多様なモチーフや作画力の調和を取る工夫

出所：佐久間アートプロジェクト

3.3.4. アートウォールの現場設置に関して

完成後のアートウォールを駅舎に設置する工程について報告する。設置にあたって最も留意しなければいけないのが安全面への配慮である。高い公共性を備える公共交通機関の施設であることに加えて、設置場所が利用客の動線上に位置することから、施設を管理するJR東海からは極めて高い水準の安全性確保が求められた。この要望への具体的な対応として、駅舎建屋構造へ強度を持った固定を行い、また、地震等の不測の自体において万が一落下した場合にも下部で通過している利用客に落下しないようにセーフティワイヤを取り付けるといった施策を実施した。一連の対応にあたっては近隣地域で建設事業を手がける須山建設株式会社に協力を仰ぎ、一級建築士監修のもとで建屋の調査や設置のための設計を進め、現場設置へと至った（図-17）。



図-17 専門家による建屋の測量、安全性の検討

出所：佐久間アートプロジェクト

3.3.5. アートウォールの画材に関して

〈佐久間アートプロジェクト〉における塗料は三つの点に留意して選定を行った。一点目は水性で学生・児童が安全に作業を実施できる事、二点目は審美性を高めるために発色が良い事、三点目は耐候性が強く長期的時間経過後においても経年劣化で塗膜が剥離しにくい事である。そして選

定の結果、ターナー色彩株式会社¹²が販売するビッグアートカラーを採用した（図-18）。当該商品はテーマパーク等における使用実績も豊富であり、作業性が良く、長期的観点から塗膜劣化がしにくい事を優先した。そして、中川と小川にて実際に使用するアルミ複合板を用いた塗膜のクロスカット試験¹³を行い選定に至った。



図-18 安全性が高く、耐候性の強いビッグアートカラー

出所：佐久間アートプロジェクト

3.4. 佐久間アートプロジェクトの経費

〈佐久間アートプロジェクト〉の経費に関して述べる。2章3節で述べたように、本プロジェクトの資金は全て浜松市近隣企業からの協賛金で賄われている。そのため、浅野を中心とした〈シン・サクマ計画〉の企業経営者達が各企業に協賛協力の依頼を行った。その結果、1,244,000円の協賛金が集まり、アートウォール制作費に約53万円、地域との交流費用に約44万円、合計974,036円の経費を使用した（表-7）。尚、残額は〈シン・サクマ計画〉の口座にて管理され、今後の佐久間町地域創生活動に使用される予定である。尚、主な協賛企業は表-8に記す通りである。

表-7 佐久間アートプロジェクトの経費

使用内容	金額
アートウォール制作費	536,492円
画材関連費	165,784円
交通費関連費	214,830円
制作雑費	155,878円
地域との交流費用	437,544円
合計	974,036円

出所：筆者作成

表-8 佐久間アートプロジェクトの主な協賛企業一覧
(50音順)

浦川キャンプ村 / H.S.E☆STYLE / 遠州中央農協佐久間支店 / オールディーズカフェハニーディップ / 割烹旅館おかめ / 加藤配管 / 兼八産業株式会社 / 株式会社イーグル / 株式会社浦川建設 / 株式会社カネキ / 株式会社坂下製作所 / 株式会社静岡新聞社 / 株式会社道林建設 / 株式会社ファイトフォー / 株式会社みずしまトータルサポート / 株式会社吉田設備 / 五平餅のまるぶく / コンダ乳業 / 向山化工 / サンレイ食品株式会社 / 静岡ガスコム株式会社 / 静岡文化芸術大学 / 静岡放送株式会社 / 柴コーポレーション株式会社 / 須山建設株式会社 / ダイイチガスコム株式会社 / 天竜観光協会佐久間支部 / 東京海上日動パートナーズ東海北陸 / 東電設工業株式会社 / 東陽機器販売株式会社 / 東洋計器株式会社 / 特定非営利活動法人トータルケアセンター / Total Life Design 飯田康人 / 浜松液化ガス株式会社 / 浜松市天竜商工会佐久間支所 / ファイナンシャルアライアンス田中美佳 / ヘアーサロンノリモト&美容室RAKU / 豊栄産業株式会社 / 松浦電設 / 安江一将税理士事務所 / 山城屋 / 山正酒店 / 有限会社岩昇 / 有限会社水窪タクシー
--

出所：筆者作成

4. 佐久間アートプロジェクト関係者へのアンケート調査

4.1. アンケート調査概要

アートウォールは2023年8月3日に浦川駅に設置され、〈佐久間アートプロジェクト〉は完了した。駅舎を思い出の器として佐久間の慣習や風物を描き、人口減少と共に薄れていく佐久間の記憶をアートウォールに留めるという当初の目的は達成したと言えよう。しかしながら、〈シン・サクマ計画〉は「佐久間町を活性化させたい」という理念のもとに今後も活動を継続実施していく。そのため、今後の活動改善の参考とするべく〈佐久間アートプロジェクト〉の関係者にアンケート調査を実施した。

アンケート調査の内容について以下に述べる。調査対象者は〈佐久間アートプロジェクト〉に関わった行政関係者/企業関係者（スタッフ参加）/企業関係者（協賛のみ）/児童（小・中学生）/学生（大学生）である。調査はインターネット調査方式（Googleフォーム）にて行い、選択式、5段階尺度方式、自由記述式と複合的な方式を採用した。調査期間は2023年8月11日から2023年8月30日の期間で、アンケート回収数は37件であった。質問項目は全10問で、〈佐久間アートプロジェクト〉への参加前と参加後での変化や気づきを問う質問項目が中心となっている。以上を纏めると表-9の通りとなる。

表-9 佐久間アートプロジェクト関係者へのアンケート調査概要

対象者	行政関係者 / 企業関係者（スタッフ参加） / 企業関係者（協賛のみ） / 児童（小・中学生） / 学生（大学生）
調査日	2023年8月11日～2023年8月30日
調査方式	インターネット調査（Googleフォーム） 質問1、質問8は選択式、質問2から7、質問10は5段階尺度法、質問9は自由記述式を採用
回収数	37件
質問項目	1. 参加形式はどれですか？ 2. 〈参加前〉に感じた佐久間地域への「歴史」や「風物」への興味度合いを教えてください。 3. 〈参加後〉に感じた佐久間地域への「歴史」や「風物」への興味度合いを教えてください。 4. 〈参加前〉に感じた佐久間地域への「愛着」や「親和性」の度合いを教えてください。 5. 〈参加後〉に感じた佐久間地域への「愛着」や「親和性」の度合いを教えてください。 6. 〈参加前〉に感じた地域住民と地域外の学生との交流の「必要性」や「重要性」の度合いを教えてください。 7. 〈参加後〉に感じた地域住民と地域外の学生との交流の「必要性」や「重要性」の度合いを教えてください。 8. 〈佐久間アートプロジェクト〉において特に良かったと感じる事を3つ選んでください。 9. 参加した事で御自身の中での変化（考え方や行動、知識の吸収等）があれば自由に書いてください。 10. 〈佐久間アートプロジェクト〉の満足度の度合いを教えてください。

出所：筆者作成

4.2. アンケート調査の結果

アンケート調査の結果を述べる。まず、質問項目1にて調査対象者の属性を確認した。属性は行政関係者、実働参加した企業関係者、協賛のみの企業関係者、参加した児童（小・中学生）、参加した学生（大学生）の5つに分類した。尚、企業関係者を〈スタッフ参加〉と〈協賛のみ〉に分けたのは金銭だけの支援と実労働を伴う支援ではどのように相違が発生するかを知るためである。その結果、対象者属性と人数の分布は表-10の通りとなった。

表-10 質問項目1 参加形式はどれですか？

対象者属性	人数
行政関係者	2名
企業関係者（スタッフ参加）	7名
企業関係者（協賛のみ）	12名
児童（小・中学生）	5名
学生（大学生）	11名
合計	37名

出所：筆者作成

次に質問項目2から質問項目7までの結果を示す。〈佐久間アートプロジェクト〉関係者はプロジェクトへの参加を通じて様々な意識の変容が発生しており、それらの意識変容を対象者属性毎に確認できる内容となっている。質問項

目2、3では〈佐久間地域への「歴史」や「風物」への興味の意識変容〉を（表-11）、質問項目4、5では〈佐久間地域への「愛着」や「親和性」の意識変容〉を（表-12）、質問項目6、7では〈地域住民と地域外の学生との交流の「必要性」や「重要性」の意識変容〉が示されている（表-13）。

表-11 対象者属性毎による質問2、質問3の平均値と変化率

対象者属性	人数	質問2 平均値	質問3 平均値	変化率 (%)
行政関係者	2名	3.50	4.00	14
企業関係者（スタッフ）	7名	3.57	4.00	12
企業関係者（協賛のみ）	12名	2.92	4.08	40
児童（小・中学生）	5名	3.40	4.20	24
学生（大学生）	11名	4.09	4.64	13
合計	37名	3.49	4.24	22

出所：筆者作成

表-12 対象者属性毎による質問4、質問5の平均値と変化率

対象者属性	人数	質問4 平均値	質問5 平均値	変化率 (%)
行政関係者	2名	3.50	4.00	14
企業関係者（スタッフ）	7名	3.57	4.29	12
企業関係者（協賛のみ）	12名	2.67	4.25	59
児童（小・中学生）	5名	3.60	4.40	22
学生（大学生）	11名	4.00	4.82	20
合計	37名	3.41	4.43	30

出所：筆者作成

表-13 対象者属性毎による質問6、質問7の平均値と変化率

対象者属性	人数	質問6 平均値	質問7 平均値	変化率 (%)
行政関係者	2名	4.00	4.00	0
企業関係者（スタッフ）	7名	4.14	4.71	14
企業関係者（協賛のみ）	12名	2.83	4.08	44
児童（小・中学生）	5名	4.00	4.80	20
学生（大学生）	11名	4.27	4.64	8
全体	37名	3.73	4.46	20

出所：筆者作成

続いて、〈プロジェクトで特に良かったと感じた部分〉について尋ねた質問項目8の結果を述べる。次の7項目（①駅舎が華やかになった。②浦川地域が華やかになった。③浦川の歴史や風物が紹介できた。④観光客へのアピールになる。⑤浦川への愛着が増した。⑥地域内外の交流が促進された。⑦地域内での交流に繋がった。）より3項目を抽出する選択肢形式で行った。その結果は表-14に示す通りである。

表-14 対象者属性毎による質問項目8の結果

行政関係者	2名	駅舎が華やかになった(2名)		
企業関係者（スタッフ）	7名	地域内での交流に繋がった(5名)	浦川への愛着が増した(4名)	駅舎が華やかになった(3名) 地域内外の交流が促進された(3名)
企業関係者（協賛のみ）	12名	駅舎が華やかになった(7名) 浦川への愛着が増した(7名)	観光客へのアピールになる(6名) 地域内外の交流が促進された(6名)	
児童（小・中学生）	5名	駅舎が華やかになった(5名)	浦川地域が華やかになった(3名) 浦川の歴史や風物が紹介できた(3名) 観光客へのアピールになる(3名)	
学生（大学生）	11名	駅舎が華やかになった(7名) 浦川への愛着が増した(7名)	浦川の歴史や風物が紹介できた(6名)	
全体	37名	駅舎が華やかになった(24名)	浦川への愛着が増した(18名)	地域内外の交流が促進された(17名)

出所：筆者作成

そして質問項目9（参加した事で御自身の中での変化があれば自由に書いてください）に関する結果を述べる。多様な回答があったが、対象者属性ごとの代表的なものを表-15に記す。

表-15 質問項目9の主な回答

対象者属性	回答
1 企業関係者（スタッフ）	今後佐久間町が当時の賑わいを取り戻すきっかけになったのだと思います。
2 企業関係者（スタッフ）	地域の笑顔を見る事ができこの活動を続ける役割を感じるイベントになりました。
3 企業関係者（スタッフ）	浦川について全く知識がなかったため、自然や文化に触れることでもっと知ってみたいと思うようになりました。
4 企業関係者（協賛のみ）	学生の方々のイキイキとした姿を見て刺激を頂きました。大人が主役ではなく大人が未来に活躍する子供や学生たちの環境を整えてあげる事がとても大切だと思いました。
5 企業関係者（協賛のみ）	浜松市より車で高速等を使いかなり近いと感じました。佐久間と言うと山奥と言うイメージがありましたが変わりました。
6 企業関係者（協賛のみ）	中山間部は都市部に比べてメリットをあまり感じていなかったが、あのような場所で暮らしたほうが幸福度が上がるのではないかと考えるようになった。
7 企業関係者（協賛のみ）	直接参加したのではないのですが子供たちが浦川の良さを改めて知るきっかけになる良い機会だったと思います。
8 児童（小・中学生）	浦川をもっと賑やかにしていきたいという気持ちが高まった。

9 児童 (小・中学生)	浦川のことを知れた。
10 学生 (大学生)	学生の活動というのは、様々な方々に支えられて初めて成り立っているということが分かった。そしてそれを実行に移すには、人々に理解してもらえるような計画を立てることが重要だと考えた。
11 学生 (大学生)	今までここまで本格的にみんなで協力して1つの作品を作るということはありませんでした。事前調査をしたり、役割分担を決めたりと、みんなでプロジェクトに参加する上で必要な様々な経験ができました。
12 学生 (大学生)	自分の地元のこととも今回みたく深く知りたいと思うようになった。
13 学生 (大学生)	壁画を制作するにあたり、地元住民の方も実際に完成したものを見て「すごい」というようにいってくださったので、実物ができてようやく活動についてご理解を頂けたように思います。今後の活動においては、これを皮切りに更なる地元住民の参画を促すことができるのではないかと考える。
14 学生 (大学生)	地域とのコミュニケーションを通して実際に話すことで生まれる繋がりや、信頼などの重要さを強く感じました。作り手だけで完結してしまうことというのは大学生の制作では起こりがちで反省点、見直していくべき点であると思いました。これからの制作において対話や、コミュニケーションというのをさらに重要視していきたいと思います。

出所：筆者作成

最後に質問項目10（〈佐久間アートプロジェクト〉の満足度の度合いを教えてください）に関する結果を述べる。結果は表-16に記す通りとなり、全体では5段階評価で4.49という高い満足度となった。最も満足度が高いのは児童で、次いで学生、企業関係者（協賛のみ）、企業関係者（スタッフ参加）と続いた。

表-16 対象者属性毎による質問項目10の平均値

対象者属性	人数	質問10平均値
行政関係者	2名	4.00
企業関係者（スタッフ参加）	7名	4.29
企業関係者（協賛のみ）	12名	4.33
児童（小・中学生）	5名	5.00
学生（大学生）	11名	4.64
全体	37名	4.49

出所：筆者作成

4.3. アンケート調査の考察

アンケート調査結果の考察を述べる。まず、質問項目2から質問項目7における〈佐久間アートプロジェクトを通じた意識変容〉の結果を分析する。まず、表-11、表-12、表-13のいずれにおいても変化率が最も高かった〈協賛のみの企業関係者〉に注目すると、プロジェクト実施前は他の関係者と比較して平均値が低かったのに対して、プロジェクト実施後は他の関係者と同程度の水準まで平均値が向上している。このことから、仮に協賛のみの参加で地域の現場にはいなくとも、地域創生活動への関心を深める事が可

能であると考えられる。次に小・中学生の児童にも着目したい。地域住民である児童が〈地域の歴史や風物への興味〉〈地域への愛着や親和性〉〈交流の必要性や重要性〉の何れにおいても20%以上の変化率となった。在住者であるため、風物への関心や愛着が然程大きく変化しないと想定していたが、その事前予想とは異なる結果が導かれた。これは、プロジェクトへの取り組みが地域児童にとって地域の魅力を再発見し、また、愛着を深める効果を与えたためであると推察される。

続いて対象者属性毎に参加して良かった点を確認した質問項目8に関して述べる。〈駅舎が華やかになった〉という視覚的变化に関する回答が多かったことはおおむね想定通りであったが、〈浦川への愛着が増した/地域内の交流に繋がった〉というのはアートウォール制作過程における副次的な内容であり、このことから制作プロセスの効果を実際にうかがい知ることができるだろう。また、対象者属性別に見ても企業関係者や学生が〈浦川への愛着が増した〉を選択しており、それまで地域との関連性が薄い人に対して地域創生活動の効果が高いという事が示唆される。

そして、プロジェクト参加を通じた意識の変容を自由記述で記した質問項目9に関して述べる。着目したいのが、多くの回答においてアートウォールに関するものよりも地域に関しての意識や態度の変容が述べられている点である。例えば、「6.中山間部は都市部に比べてメリットをあまり感じていなかったが、あのような場所で暮らしたほうが幸福度が上がるのではないかと考えるようになった。」「7.直接参加したのではないのですが子供たちが浦川の良さを改めて知るきっかけになる良い機会だったと思います。」はいずれも協賛金のみの企業関係者であるが、間接的な関わり方にも関わらず、地域での生活を具体的にイメージし、地域創生の活動がもたらす児童や学生への教育効果に言及するなど、地域創生に資する意識の向上がうかがえる内容となっている。このような意識の変化は、地域創生活動を長期にわたって展開・充実させていく上で有効に機能することが期待できる。以上〈佐久間アートプロジェクト〉を通じて確認された特筆すべき効果を纏めると表-17の通りとなる。

表-17 佐久間アートプロジェクトを通じて確認された特筆すべき効果

1	地域創生活動への協賛を行う間接的関与は、地域への関心と地域参画への意識醸成に与える効果がある事が示唆された。
2	地域創生活動は地域児童にとっても地域を再発見し、愛着を深める効果がある事が示唆された。

出所：筆者作成

5. おわりに

本報告によって、アート教育を通じた地域創生活動が地域貢献に留まらず、プロジェクトに携わった其々の関係者に発生した効果を示唆することができた。〈佐久間アートプロジェクト〉完了後のアンケート調査では、間接的関与しか出来なかった企業関係者に地域への関心と地域参画への意識醸成といった意識変容が確認された。これは、長期的視点で地域創生を鑑みた場合、参画の第一歩として直接関

与のみならず間接関与の手段もまた有効であることを示唆している。また、地域創生活動は地域に慣れ親しんだ地域住民に、普段とは異なる新鮮な視点で地域を見つめ直すきっかけを与え、結果として地域の魅力の再発見や愛着を深めるといった効果が確認された。これは地域創生活動が地域内外問わず有意義な教育効果を齎すことを示唆していると言える。

6. 謝辞

〈佐久間アートプロジェクト〉は多くの方の御理解と御支援の元に実現する事が叶いました。佐久間町の皆様、浜松市行政関係の皆様、JR東海の皆様、浜松市近隣企業の皆様、静岡文化芸術大学の皆様に深く感謝を申し上げます。〈シン・サクマ計画〉は佐久間町への地域創生活動を継続実施し、地域の皆さんの一助になるように努めて参りたいと考えております。

参考文献

浜松市ホームページ (2023). 「町字別年齢別人口表」. 最終閲覧日2023年11月6日. https://www.city.hamamatsu.shizuoka.jp/gyousei/library/1_jinkou-setai/007_nenreibetsu.html

注釈

- ¹ 建築物や工作物の壁面を用いた装飾・芸術作品を指す。本プロジェクトでは壁画をアートウォールと呼称している。
- ² 地域の持続的な発展、活性化を目的とした活動。
- ³ 静岡県浜松市に本部を置く公立大学。文化政策学部とデザイン学部の2学部で構成されている。2000年開学。
- ⁴ 静岡県浜松市佐久間町と愛知県北設楽郡豊根村に跨り、天竜川水系天竜川本流に設置された地上高156m、堤頂長293.5mの重力式コンクリートダム。1956年に竣工、1957年に開業。
- ⁵ 浜松市立浦川小学校
- ⁶ 浜松市立佐久間中学校
- ⁷ 静岡県立浜松湖北高等学校佐久間分校
- ⁸ 静岡文化芸術大学で開講されている「地域連携演習」という業。地域組織と協働して成し遂げる事を学びの目的としている。
- ⁹ 浜松市にある総合建設会社
- ¹⁰ 江戸時代の歌舞伎役者である四代目・尾上栄三郎偲んで行われるようになった素人歌舞伎。衰退して1962年に終了したが、1989年に復活。しかしながら、保存会の存続が困難となり2019年に定期公演を終了した。
- ¹¹ アルミ板で樹脂を挟んだ板状の材料。樹脂は不燃性である事が多く、同一厚みのアルミ板より大幅に軽量である。
- ¹² 大阪に本社を有する塗料メーカー。
- ¹³ 塗料の塗膜密着性試験。塗装後に素地まで達する深さで6本の格子状の切り込みを入れ、その後セロテープ等を圧着させて引き剥がし剥離状態を確認する試験。

